

薬だつ知識

年を重ねると複数の病気を併せ持つことが多くなります。あちこちの医療機関を受診するうちに薬の数がだんだん増え、10種類以上の薬を服用している高齢者も少なくありません。「こんなにたくさん飲んで大丈夫？」と心配な人もいますでしょう。高齢者では常用薬が6種類以上になると、さまざまな副作用症状が出やすくなるという報告があります。また、薬の種類や飲む回数が増えるほど、飲み忘れや飲み誤りが多くなる傾向があり、予期せぬ副作用が起きたり、期待した治療効果が得られなくなる場合があります。それを改善しようと、さらに薬を追加されることになり、決して好ましいことではありません。ところで、薬の数が多からといって、単純に悪いとは言えません。医師は病状に応じて必要な薬を選び処方します。原則

自己判断でやめず相談

的には医師の指示通りに服用すべきです。しかし、自己判断で薬を選び、中断する人もいます。それにより症状の悪化や、思わぬ合併症を引き起こすことがあるので絶対にやめましょう。服用している薬の数を減らしたい時は、まずはかかりつけの医師や薬剤師に相談してください。①ほとんど飲んでいない薬がある②少しでも薬を減らしたい③薬を飲んだ後にこんな症状が出たーなどを遠慮せずに伝えてください。服用している全ての「お薬手帳」があると、とてもスムーズに相談できます。

薬剤師は、薬の必要性、重複、飲み合わせ、副作用などを検討し、処方医と連携して、薬の調整をお手伝いします。医療機関でも多種類の薬を服用されている場合に処方薬剤を総合的に調整して、薬の数を減らす取り組みを始めています。ぜひ、かかりつけの医師や薬剤師にご相談ください。(鹿児島県薬剤師会 常務理事・岩元暢秀)

読者の皆さんからの薬などに関する質問を募集しています。はがきかファクス099(254)612911でお寄せください。〒890-8589 鹿児島市与次郎2-8-15 県薬剤師会「薬だつ知識」係まで。

9. 多剤処方



多くの薬を処方されていても、自己判断で服用をやめず、薬剤師らに相談しよう